

インターセッション

12月19日から1月24日まで、RITは冬休み期間であり、基本的に学校は授業を開講していなかった。そのため、多くの学生は実家に帰っていた。しかし、その冬休み期間のうち1月の3週間を「インターセッション期間」と呼び、特定の授業だけ開講された。私はこの期間に自分の専攻である心理学の興味のある分野について調べ、それについて論文を書き、発表をした。私は「教室内のコミュニケーション」について調査した。テーマは教室内で先生と学生の間または学生同士で発生するミスコミュニケーションである。社会的な面と文化的な面に焦点を当て、教室内で不安や神経質に感じる先生や学生について考えた。この期間で私は5つほどの論文を読み、自分なりに理解し、意見をまとめるように試みた。ちょうど1年前には英語の論文を読むことに非常に苦労していたが今ではそのようなことはない。留学を通して英語力が向上したと実感できた。

留学生生活を振り返って

約8ヶ月の留学生生活を振り返って、生活面や英語力、自分の専攻である心理学様々な面で多くの発見をし、そこから自分なりに学び、考えた。生活面では日本にいた時と比べて健康に気を使うようになった。野菜を摂るように心がけ、ジムに行き運動も継続させた。そのきっかけとなったのは6月にアメリカに来た時の最初の1週間の食事の内容であった。ハンバーガーやステーキ、ピザなどを毎日食べるような生活を送っていた私は食生活を改めるようになった。その結果、留学期間中、大きな怪我も病気もなく過ごすことができたと考えている。英語力も向上したと感じている。「話す、聞く、書く」に関して日常の会話から学問的な英語の使い方、表現の仕方を学んだ。また、それは日本では学ぶことができないものばかりであった。様々な場面で先生や友人からそれらの単語や文法を学んだ。最も英語が身についた方法の一つはネイティブスピーカーの人と会話をすることだった。彼らと話すことで自分の文法や英語の発音などを確認することができた。秋学期からは“Attitude & social cognition”という心理学の授業を履修した。心理学の授業では授業の内容である態度とは何か、態度にはどのような要素があり、それらがどのように構成されているのかを学んだ。授業内容以外にも多くを学んだ。アメリカの学生や先生の態度、授業方針や聴覚障害を持つ学生の授業参加など教室には多くの発見があり、それらは日本のものとは大きく異なっていた。また、授業を通して学術英語による論文の書き方や読み方も学んだ。また、旅行においても多くのことを学んだ。西海岸を車では旅行した時には自然の素晴らしさを知った。年越しの時に訪れたニューヨークのタイムズスクエアには多くの人々が集まった。しかし、年明け後のタイムズスクエアには大量のゴミが散乱していた。年明け直後にゴミ清掃業者がタイムズスクエアの大掃除をしている姿が印象に残った。

留学を通し、最も印象に残っていることはやはり日本人とアメリカ人のコミュニケーションの違いについてである。日本とアメリカのコミュニケーション比較について、人を敬うかどうかそれが言葉に現れている。日本には敬語というものがあり、人を尊敬している気持ちを直接相手に伝えることができる。アメリカでは敬語はほとんどなく教授と話す時も友達と話す時も同じ立場で話をする。友達もできやすくコミュニケーションがスムーズに進む。アメリカ人のコミュニケーションは敬語を使いような日本のそれとは異なり、コミュニケーションの間に壁がないように感じる。コミュニケーション比較とは文化や言語の要因が非常に大きいと感じた。

約8か月の留学生活は私にとって非常に充実した経験となった。この経験を将来に生かそうと考えている。将来は英語を使った仕事をする、そのためには日本に帰国後、継続して英語を勉強する。